

第14課 病気 (その2)

1. この課のねらい

- (1) 薬局で症状を説明し、薬を入手するために必要な表現を習得させる。
- (2) 分からない言葉を聞いたときに、その言葉の意味の説明を求めながら目的を達成する表現能力を身に付けさせる。
- (3) 薬の服用法を尋ね、その説明を理解させる。
- (4) 病気の症状について説明する言葉をもう一度学習させ、今後の処置についての、医者や受付での指示を理解させる。

2. 学習項目とその扱い方

[会話一]

(1) 学習項目表

区分	使用	理解
最重要項目	<p>○すみません。風邪薬がほしいんです。(1)</p> <p>○うちの子供なんです、せきがひどいんです。(3)</p> <p>○熱は、7度5分ぐらいなんです。(5)</p> <p>○小学校の2年です。(7)</p>	<p>○はい、どんな症状ですか。(2)</p> <p>○熱は。(4)</p> <p>○お子さん、おいくつですか。(6)</p> <p>○じゃあ、これを飲ませてみてください。(8)</p>

(2) 準備

- ①風邪薬、胃腸薬、痛み止めなど、何種類かの薬を用意しておく。(教科書の[関連表現]参照)
- ②また、学習者の家族構成や本人及び家族の持病などがあれば、調べておくとうよい。
- ③さらに、練習として学習者を実際に薬屋に行かせる場合は、どの薬屋に行かせるか、何をかわせるかなどを決め、必要であれば、その薬屋に事情を話して協力を頼んでおく。

(3) 導入

- ①「最近、病気になりましたか」「今、風邪をひいていませんか」などと病気の話を切

り出し、その場合の症状や処置などを発表させる。このとき、「熱が7度5分ぐらいあります」「せきが出ます」「頭が痛いです」などの表現も導入しておくといよい。

②また、学習者の家族のことについても尋ね、症状や処置とともに、その人の年齢、子供の場合は学年なども発表させる。

③その後、「～さんのお子さんが風邪をひきました。～さんは薬を買いに行きます」などという設定で会話をさせてみる。

(4) 練習

①本文のテープを聞いて繰り返す。

②次に〔1. 表現練習〕を行う。かなり長い文だが、「どんな薬がいいでしょうか」から始めて「寝ているんですが、どんな薬が……」、さらに、「風邪をひいて寝ているんですが、どんな薬が…」というように少しずつ前の方を長くして行って、文の形を定着させるとよい。例文がしっかり言えるようになってから、置きかえ練習に入るとよい。

③また、この文が長すぎてなかなか言えない場合は、あまりしつこく繰り返して自信を失わせるより、家で練習してくるように指示したり、「子供が(風邪をひいて)寝ているんですが…」だけをとってあらかじめ定着させた方がよい。

④なめらかに言えるようになったら、会話全体の練習に戻り、病気になった人及び症状を指定して、学習者に薬を買う練習をさせる。教授者は薬屋になって、用意しておいた薬の中から適当なものを渡す。

⑤学習者の反応が早くて問題がないようなら、学習者に症状などを自由に想定させて会話練習を行ってもよい。その後、実際に学習者を薬屋に行かせて風邪薬などを買わせるるとよい。

⑥使役表現は〔5. 表現練習〕を使って練習するが、ここでは完全に使えるようになるまで練習させる必要はない。〔会話一1〕に出ている「飲ませてみてください」の中国語訳を見せながら練習し、大体の意味をつかませる程度でよい。

〔会話一 2〕

(1) 学習項目表

区分	使用	理解
最重要項目	<p>○一回に どのくらい 飲めばいい んでしょう。(1)</p> <p>○すみません。日本語が まだ よ く分からないんですが、キャップ って 何でしょうか。(3)</p>	<p>○ええと、子供の場合は、一日三回 毎食後 キャップに 一杯ですね。 (2)</p>
重要項目	<p>○はあ、これで 一杯 飲めばいい んですね。(5)</p>	

(2) 準備

①〔会話一 1〕と同様に行う。

②また、〔3. 表現練習〕のために、キャップ、解熱剤などの実物を用意しておくとい

(3) 導入

①〔会話一 1〕で買った薬を用いて、その服用法について尋ねてみる。初めは教授者の方が「一回にどのくらい飲めばいいんでしょう」と聞き、学習者に薬の箱などに書いてある服用法を答えさせてみる。

②次に、学習者に服用法を尋ねさせてみる。このとき教授者はわざと「キャップ」とか「スプーン」とかの言葉を使い、学習者が「すみません。日本語がまだよく分からないんですが、キャップって何でしょうか」というように質問できるか確認する。

③その後、本文のテープを聞かせて、内容が理解できたかどうか確認する。

(4) 練習

①テープに付いて言わせたり、教授者の発話の後を繰り返させたりして練習する。

ア、「一回にどのくらい飲めばいいんでしょう」については、まず、動詞の「飲む」を「入れる」「使う」「払う」「読む」「書く」などにかえて、「～ば」の形の練習をする。「一回に…」の形が長すぎるようなら、最初は、「飲む」→「飲めばいいです」などのように単純な練習から始めればよい。なめらかに言えるようになったら、〔2. 会話練習〕を行う。

イ、「すみません。日本語がまだよく分からないんですが、キャップって何でしょうか」については、まず、〔3. 表現練習〕を使って単純な置きかえ練習を行う。そ

の後、教授者が「病院へ行くときは、保険証を持って行ってください」と発話し、「すみません……保険証って何ですか」と言うような質問をさせる。学習者の反応が早く問題がないようなら、徐々に文を長くしていく。学習者に理解できない言葉を挿入しておき、それについて問いかえさせることがポイントである。答えは、教授者が「これですよ」と言って示せるように、現物を用意しておく。

②個々の練習が終わったら、会話全体のロールプレーを行う。用意しておいた薬を使い、その服用法について会話をする。

〔会話一 3〕

(1) 学習項目表

区分	使 用	理 解
最重要項目	○正道が また 風邪なんです。(1) ○昨日、夜から 熱を出して、せきがひどいんです。(3) ○今朝は 39度 ありました。(5) ○6回ぐらいです。(7)	○解熱剤を 出しますから、それ 飲ませて 二、三日 様子を見 てまた 見せてください。(10)
重要項目		○流感のようですね。(8)

(2) 準備

- ①同じ場面で病気の種類、症状などをかえた応用会話のテープを用意する。
- ②また、病院に行って診察を受ける場面を作りやすいように教室の椅子などの位置を考える。

(3) 導入

- ①「最近病院に行きましたか」から話を始め、そのときの症状について医者とどんな話をしたかなどを話し合う。
- ②次に、学習者の一人を患者にし、教授者が医者になって会話をしてみる。このやりとりの中で、病気の名称やそのほか知っておくと便利な関連語彙を導入しておくとい。
- ③その後、応用会話のテープを聞かせる

(4) 練習

- ①会話本文や応用会話のテープを繰り返し練習する。
- ②なめらかに口が回るようになったら、次のようなロールプレーを行う。

学習者が患者となって、診察室（教室）に入ってくる。患者は症状について話し、診察を受ける。医者（教授者）は病名を伝え、今後の指示を与える。指示に使う表現は、会話本文に出ているものに限る必要はない。しかし、学習者は、最終的には自然に話されたものが理解できるようにならなければならない。学習者に理解できない言葉を故意に挿入して、聞き返させたり、説明を求めさせたりする練習も重要である。

③ロールプレーが終わったら、患者はどんな症状だったか、病名は何か、医者はどうな指示を与えたかなど、やりとりの内容について質疑応答し（学習者が二人以上の場合は他の学習者に質問する。）、学習者の理解を確認する。

④次に、子供や日本語の全然話せない友人を病院に連れてきたという想定で、同様にロールプレーを行う。

〔会話一4〕

(1) 学習項目表

区分	使用	理解
最重要項目	○はい、赤い、小さいのを一つと、ピンクの大きいのを二つですね。(4)	○三日分ありますから、今一回分飲んで、後は食後に飲んでください。(3) ○お薬がなくなったらまたいらしてください。(5)

(2) 準備

①〔会話一1〕と同様に、いろいろな種類の薬を用意しておく。また、病院で渡される薬の袋やシロップの瓶なども用意する。

②さらに、内容をかえた応用会話を作ってテープに録音しておく。

(3) 導入

会話本文や応用会話のテープを聞かせ、どんな薬を、いつ、どのくらい飲めばいいのかなどと質問してみる。

(4) 練習

①テープを聞いて繰り返させたり、教授者の発話の後に付いて言わせたりして練習する。

②その後、学習者が患者、教授者が受付係となり、服用法を説明しながら薬を手渡し、今後の指示を与える。

やりとりの中で、言っていることが分からないときに、学習者は聞き返したり、分かりやすく説明することを要求したりしなければならない。また、大体分かったと言ったときでも、一応自分で繰り返して確認する方法も是非身に付けさせたい。

やりとりの後、学習者の理解を確認するために、内容についての質疑応答を行う。

③また、「赤い、小さいのを一つと、ピンクの大きいのを二つですね」については、第5課の復習になるが、もし、「(物)を(数)」という語順が定着していないようなら、〔4. 表現練習〕を使って練習する。

④助数詞もいくつかでているが、今まで習ったものや、それ以外知っておくと便利なものを含めて整理し、練習しておくといよい。

3. 文型・文法に関する参考事項

「イ形容詞」と「ナ形容詞」

「イ形容詞」と「ナ形容詞」は、国文法などでいう「形容詞」と「形容動詞」にそれぞれ対応する。この教材では、学習者の便宜を考えて名詞の前に接続する形（「赤い本」と「元気な子供」）の違いに注目して、「イ形容詞」「ナ形容詞」と呼ぶ。共に「形容詞」とするのは、中国語を含め多くの外国語でこの二つを区別せずに「形容詞」としており、学習者にとってなじみやすいためである。

「イ形容詞」「ナ形容詞」の否定形の丁寧体には二つの形があるので、注意が必要である。

		肯定形	否定形	～て形
赤い (丁寧体)	現在形	赤い (赤いです)	赤くない (赤くないです 赤くありません)	赤くて
	過去形	赤かった (赤かったです)	赤くなかった (赤くなかったです 赤くありませんでした)	
元気な (丁寧体)	現在形	元気だ (元気です)	元気じゃない (元気じゃないです 元気ではありません)	元気で
	過去形	元気だった (元気だったです 元気でした)	元気じゃなかった (元気じゃなかったです 元気ではありませんでした)	